



障害をもつ幼児の保育(5)

—この子と出会ったとき—

津守 真 (M)

津守 房江 (F)

歩くという事 その五

F 歩くという事で五回目になります。なぜこんな歩くことにこだわったかという点、歩くことが子どもにとって特に幼い子どもにとって、生きること、存在することにつながっていると思うからです。今回はいろんな歩き方をした子どもたちに出会ったときのことを考えて

いきたいと思います。大人はそれに関わりながら、この子どもたちはいまどんな心でいるのか、もし危機的状況ならどうやって自分の気持ちを立て直すか、など考える手がかりがこの中にあるのではないのでしょうか。

ジグザグに歩く

M はじめてW君に出会ったとき、この子はちよつと歩いては立ち止まってまた元に戻り、また歩いては元に戻るといふ具合にジグザグに歩くことが私の目を引きました。きつと心の中に同じような働きがあるのではないかと私は思いました。そうやって庭のこちらから向こう側にまで行きつ戻りつしながらジグザグに歩いていきました。それからしばらくして彼は園から外に出て行きました。そのときもちよつと足を踏み出しては元に戻り、賑やかな方に行こうとしてはまた戻りました。そして私も知らない細い道に歩いて行つてはまた戻り、坂の途中でちよつと立ち止まって腰を下ろして休み、それからまた立ち上がつて歩いては戻り歩いては戻り、そうやってずいぶん長い時間を歩きました。帰つてくるとお母さんはとつても心配そうに待っていました。この人が外を歩くなんていうことは初めてで、そんなことはやつ

ていいのか、またできるのかどうか、そういうことにお母さん自身が迷いを持っていると私は思いました。

F そのとき、W君は何歳でしたか。

M 多分幼稚園の五歳くらいでしょう。

F あなたはそれをどういふふう考えたのでしょうか。

M 彼は非常に迷いの多い人だと思いました。私も一緒に少し歩いては立ち止まったり、また戻ったり、そういう具合に付き合っていました。ちよつと同じころにもう一つこの子について私の目を引いたことは、あぐらをかいて床に座つてかなり長い時間絵本を見ているのだが、その時に絵のある部分を手で隠すのです。私はそれが何だかいまだによく分からないんだけど。手でなくとものをそこに置いて隠すということもありました。

F それは自分の行こうとする所がはつきりしないとか、自分が何を見て自分の中に何を取り入れようかという、自信みたいなものが欠けていたととらえるのでしょ

うか。

M いや、そうではないように私はそれをとらえています。例えば外出して見通しのいいところに来ると、そこに立ち止まってじっと前方を見たり、横のほうを眺めたり、そうやってかなりあたりの景色を眺めていて、必ずしも自信がないというふうには見なかった。むしろどうしたらいいのかなっていう迷いの方が強かったと思う。

F W君はいつも車に乗せられて来ていましたけれど、家でも歩く経験が少なかったのかも知れませんが、私がお弁当を食べているところを見た時には、自分が多分気に入らないものを食べると、ちびつと食べて自分の見えない後へポンツと捨てるということがあって、「ああ、この人は取り入れられないものは見えない所にポンツと捨てるんじゃないかな」って、そんなふうに思いました。歩くこととは結びつけては考えていなかったけれども。

M ジグザグに歩くときに私は今のように思ったので、そのジグザグを否定しないでそれに付き合って私も一緒

にこっち行った

り、あっち行っ

たりしながら、

彼にそれで良い

んだよというふ

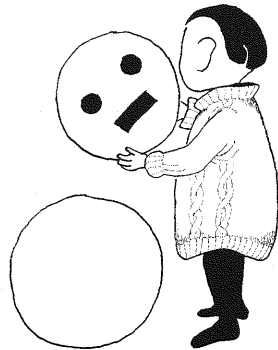
うなつもりで一

緒に歩いた。こ

のジグザグに歩くということはW君だけでなくその後何人もの子どもについて出会いました。その度に私は「あー、この子はこの歩き方と同じような心の動きがあるんだな」と思って、それで良いんだよというふうなつもりで歩きました。それからW君について、一か所にあぐらをかいて座ると今度は逆にもうどうしたってそこから動かないというようなきもありません。

足音を立てて歩く

F ジグザグに歩く人もあれば、足音をバタバタとたて



て歩くことが特徴的な歩き方だった人もありますよね、

G君でしたか、それについて話してください。

M G君は大きな靴をはいていて、というのはこの子は足が大きかったからでもあります。革靴を履いていて、床を歩くときにバタバタ音をたてていました。私はしばらくの間は気づかなかったんですけれど、幼稚部の小さい子ども部屋によく来て、彼が来ると靴の足音が大きいので、小さい子の中には怖がる子どもが何人もありました。G君が来ると「あー、困ったなあ。小さい子が怯えてしまうかもしれない」と思って、急いでG君のそばに行つて「静かに歩こうね」なんて言つたんです。けれども、G君はそんなことはお構いなしに大きな靴音をたててバタバタバタというふうに歩きました。しばらくたってから気が付いたことは、G君は自分があることをちゃんと認めてほしいと思つて音をたててるんだな、ということ。G君は小さい時には普通の幼稚園に通つていて、途中で脳炎になつてある時期から急激に

言葉も出なくなり、理解力もぐつと減少して、それで幼

稚園の先生も大人もその変わりようを見て非常にびつくりしたんです。ある部分は彼の記憶はしっかりと残っていました。それだけにG君のその様子を見ると、G君が大きな足音をたててバタバタと歩くということも、彼の何かそういう自分の中に残っている記憶と結び付けて「こんなことが僕は分かんなくなつちやつたんだ、どうしたらいいんだ、困ってるんだ、教えてよ」と言つてい

るように思えるようになってきました。
F 何かを探しているように見えたことがありましたよね？

M そうです。大声をあげて走り回ります。一緒に付いて走るだけで大変でした。走りながら絵本を手に取つてそれを投げるんです。また、自分の好きな絵本を破いて、それをパーっとばらまいて、それからその絵本の切れ端を集めてくるという、そういうことを遊びとして何度もやるようになりました。そういう姿を見るうちに大

きな足音を立てて歩くということも、私にはだんだん彼の考えの中にあることが分かってきたような気がします。それから一、二年後に彼は家で大きな発作を起こして死ぬんですけれども、そのしばらく前ころには、「どうしても外に行きたい」と言つて、園の玄関で私の手を引つ張るんですね。自分の行きたいと思われる方向があつて、そつちに連れて行くんです。その行きたい方向は大概道が行き止まりになっているところなんです。行き止まりになつていることが分かつていながら彼はその道を走りました。そうやつて何度か私は外に行くところを付き合つたけども、走るのも速いし、手を引くのも力が強いので困難が多かつた。でもそれをやつて「ああ、これで良かったんだな」つてというような満足感が私にもあつたし、彼にもあつたような気がしたんです。後になつて彼が死んだとき、お父さんは「こうやつて先生の手を引つ張つて、どうしてもここへ行きたいということころと一緒に歩いて行く、それこそがあのときの一番大事

な教育だったんですね」つて、言つてくれました。せっかく外出したのにもう一度家に戻ることが何度もあつたそうです。人はそれを「わがまま」というけれど、そういうときは、絵本の紙片を忘れていたとか、大人には簡単に分からない理由があるんですね。

F 本当にそうですよね。

いつも走るように歩く

M いつも走る子どもつていうのも、長い年月の間には何人もいましたね。そういう子をいつも走つてると思つて、あの子は走る子だつて言つてほつとくんじゃなくて、その子にしっかりと付いて、そういう時期には特にしっかりと付いて一緒に走つたり、そばにいます、その子と一緒にいる大人のことに気が付いて、そして動きが変わってきます。

F 走つて移動するという子どもについて言えば、移動だけがあつて、本当の意味では歩いていないんじゃない

かしら。歩くことに伴う周りを見たり、花の匂いを嗅いだり、食べ物匂いを嗅いだり、一緒に歩く人の気持ちを探したりという、歩くことの中の大事な部分がスポツと抜けているように思うんです。そうやって長い時間かけて一緒に歩いてくれる人があることによって、歩くことの本質がちゃんとかめてくるんじゃないかしら。どうでしょう？

M そうですね。ただ走つてるといふときには、もう走るということすら本人には意識されなくて、まるですつと飛んでいく、そこはすつとばして飛んでいくというような、そんな具合に思えるときがありますね。一緒にしつかりと付いて走って行くことで、その途中つていふのができていくんじゃないかしら。

F ああ、なるほどね。

元気な大人でなければ一緒に走れないというのではなく、疲れちゃったから一緒に立ち止まって、「ちょっと待っててよ」とか、持っていた水筒から「お茶を一

に飲みましようよ」ということを途中で大人が提案することがあるでしょう。そういうことも大事なんだというふうに考えました。元気な屈強な人だけがそれに付き合つて、どんなにやつても疲れないというのだつたら、歩くことの本質に到達しないでただ移動だけに終わつてしまふのではないかといま気がきました。

M 確かにその通りで、「ちょっと待って、一緒に休もうよ、お水一緒に飲もうよ」そういうことが入ることによつてその子との日常的な付き合いになるんですね。

つま先で歩く

F 背伸びをして歩く子どもがいましたね。それについてあなたはこういうふうにご考えていましたか？

M まだ幼稚園に

上がらないくらい、二歳半か三歳のときだったけれ



ども、つま先で歩く、それをほとんどかかとを付けて歩くことがないくらい、いつもつま先で歩いているような姿がとても目を引きました。どうしてだろうということとは分からなかったけれども、私はその子のそれがとつても何かかわいらしく、またその子としては悩みを持っているような気がして一緒に遊ぶことに努めたんです。足の裏を地に付けないんだから、足が地に付かない生き方をしているんじゃないか。多分そういうところがあつたらうと思います。私がそんなふうなことをお母さんにしよつちゅう話し、「しつかりと足が地に付くのは、地に付いた生活の実感が必要なのでしょう」と話しながら、その子をつま先で歩くというかわいらしい姿をいつも心に留めながら遊んでいました。

F つま先立ちする女の子っていうのは小さなバレリーナたちがトウシューズでつま先で立って踊ったりするときの姿だから、とつても素敵でもあるんでしょう。だからあの子も自分は素敵でありたいと思っていたんじゃない

いかと思うんだけど。ただベタベタ、ドスドスという歩き方ではなくて、スツスツとつま先立ちをして歩いて行くその姿を自分の中で想像しながら、あの子は生きていたのかもしれないと思います。

M あー、それも本当にあるかもしれないね。お兄ちゃんはいつても手づかみで、とつてもワイルドな食べ方をする、それはお兄ちゃんの特徴だったと思う。そういう点ではバレリーナとは対照的な姿ですね。

あの子と遊ぶのは楽しいことでした。おままことやなにかをして。

F うちの女の子たちも成長期のある時期、トウシューズが欲しいってあるクリスマススの前に言い、「じゃあ、バレエを習うの？」って聞くと「バレエは習いたくない、ただトウシューズが欲しい」と言つて、友達と二人でトウシューズをはいて背伸びをした姿で踊っていたことを思い出しました。

M そうそう。私もトウシューズを探して、暮れの町ま

でいったことがあります。

F いま、いろんな歩き方をするということからトウシユーズまで発展していったんだけど、いろんな歩き方にかかわるのはいつも靴なんですよ。それでちょっと広がり過ぎるかもしれないけど、靴や歩き方について話してください。あなたはフロイトの本を取り出して読んでいましたね。

フロイトの「グラデーヴァ」

M 歩くということ、これで五回目なんだけれども、ずっと頭にまたあつたんですが、一体歩くということは人間にとって何なんだろう。歩くということをやつてテーマとして取り上げることは何なんだろうと考えていたんです。それでフロイトの芸術論の中に「グラデーヴァ」という文芸論があります。それはイエンゼンの小説の中にある、イタリアのポンペイの火山で爆発して街全体が埋まってしまったその下から発掘された考

古学の遺物の中に、素敵な若い女性のレリーフがあった。そのレリーフはひだのついたスカートをはいいて、それはその女性が歩く姿を石に刻み付けたその破片だったんです。片足はかかとを付けないでつま先で足の裏を垂直に立てて、そしてもう片足は前方に踏み出して、そういう歩き方がすぐ目にとまるレリーフでした。イエンゼンはそのことをテーマにして、それをまたフロイトが解釈をしている非常に面白いものです。それはイエンゼンのその小説の主人公が若い考古学者でそのレリーフに心を奪われて、そして幻想的に物語を進めていくという手法なんですが、彼自身が何でそれをテーマにしたかということを考えているうちに自分の幼児期の記憶の中に、隣のうちの素敵な女の子のことが思い出されてきて、その女の子は姓をベルトガングと言ったことに思い至った。ベルトガングと言うのはドイツ語で、良い足、良い歩き方、良い歩行、という意味で、その父親というのが立派な大学教授で、その娘だった。そのこと

から彼は歩くことの連想をして、美しく歩く、自信を持って美しく歩くという、そういう言葉の意味でテーマと結び付けたんですね。細かいところは忘れてしまったんだけど。フロイトがこのことを取り上げたことには私は興味をもちました。

F いや、大変面白いですよ。フロイトが幼児期の体験と歩き方ということ結びつけて考えたということが私自身も教えられてとても面白かったです。

M どうもありがとうございます。そうやって面白いって言ってもらえばこの話をしたことも無駄じゃないんだけども。この歩くということについては本当にもう一人一人違った歩き方があるって、その歩き方っていうのはその人の表現だから、さっきのようにバタバタと音をたてて歩くこともあるし、また違う歩き方もあって、足音を聞いただけで私なら「あ、誰かな？」って思うのが、母親は「あつ、うちの子だ」ってすぐ分かるのが通常です。歩き方でもって自分のうちの子どもだっていうことが分か

るっていうのも不思議じゃないですか？ 本当に十人十色の歩き方、また特色があつて、それをよく見ていればそこから私どもが学ぶことがいっぱいある。普通にはそのところはわれわれの注意から抜けてしまうところなんだけれども、私はいまのこの何回かの話の中で結論的に言うならば、その歩き方や足というものを見過ぎさないで見えていくことによつて、われわれの保育が面白いものになつていき、文化的ひろがりをもったものになる、そこが私の大変言いたいところですよ。

F それが五回目の結論ですね。